HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	2016年度北海道礼文町浜中２遺跡発掘概要報告書
Author(s)	加藤, 博文; 長沼, 正樹
Issue Date	2017-04-17
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65258
Type	report
File Information	naganuma2016.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Preliminary Archaeological Field Report of Excavation at Hamanka 2 site, Rebun Island, Hokkaido, JAPAN

２０１６年度
北海道礼文町
浜中２遺跡
発掘概要報告書

Preliminary Archaeological Field Report of Excavation at Hamanaka 2 site, Rebun Island, Hokkaido, JAPAN

Designed by YUKI Koji

北海道大学アイヌ・先住民研究センター

Center for Ainu & Indigenous Studies,

Hokkaido University

２０１６年度
北海道礼文町
浜中２遺跡
発掘概要報告書

Preliminary Archaeological Field Report of Excavation at Hamanaka 2 site, Rebun Island, Hokkaido, JAPAN

北海道大学アイヌ・先住民研究センター
Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University

例　　言

1．本概報は、2016年8月1日から8月21日にかけて国際共同研究プロジェクト「バイカル・北海道考古学プロジェクト」の一環として行った北海道礼文郡礼文町浜中2遺跡の発掘調査の概要報告である。

2．発掘調査は、北海道大学とアルバータ大学（カナダ）が組織主体となり、日本側の調査手続きは、北海道大学が担当した。調査組織は以下のとおりである。

発掘主体者　常本照樹（北海道大学アイヌ・先住民研究センター長）
発掘担当者　加藤博文（北海道大学アイヌ・先住民研究センター 教授）
調査員　A. Weber（アルバータ大学人類学部 教授）
調査員　長沼正樹（北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授）
調査員　岡田真弓（北海道大学創成研究機構 特任助教 / アイヌ遺骨等返還室 副室長）
調査員　佐藤丈寛（金沢大学医薬保健研究域医学系 助教）
調査補助員　V. M.-L. van der Haas（アルバータ大学大学院 博士課程）
調査補助員　C. Tyler（アルバータ大学人類学部 学生）
調査補助員　蔦谷　匠（京都大学大学院理学研究科 日本学術振興会特別研究員(PD)）
調査補助員　岩波　連（北海道大学大学院理学院　博士課程）
調査補助員　平澤　悠（慶応義塾大学大学院文学研究科 博士課程）

遺 跡 名　浜中2遺跡（北海道教育委員会登載番号：H-08-019）
所 在 地　北海道礼文郡礼文町大字船泊村字ホロナイホ 499-2, 499-4, 499-5
発掘面積　43.5㎡

3．2016年度の調査の実施にあたっては、科学研究費補助金基盤研究A「境界域での民族集団の形成：考古学と人類遺伝学によるアイヌ民族形成過程の解明」（研究代表者：加藤博文、2016-2019年度）、および日本学術振興会研究拠点形成事業（先端拠点形成型）「北方圏における人類生態史総合研究拠点」（プロジェクトコーディネータ：加藤博文、2013-2017年度）の助成を受けた。

4．本概報の作成は本研究プロジェクトに参加したメンバーが分担しておこなった。出土遺物のうち、土器片の拓本・断面実測およびトレースは佐藤理恵、霜出美由紀（北海道大学アイヌ・先住民研究センター事務補助員）が実施した。石器、骨角器類の実測およびトレースは長沼・加藤が実施した。
本概報の執筆分担は以下の通りである。

例　言、第1章－第2章、第4章－第5章	加藤博文・長沼正樹
第3章	長沼正樹
第6章	加藤博文

なお本年度の出土遺物のうち、動物遺存体は慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室において佐藤孝雄教授を中心に整理作業をおこなっている。また出土動物遺存体のうちカラフトブタとイヌについては、北海道大学大学院理学研究院多様性生物学分野において増田隆一教授を中心に DNA 分析を進めている。さらに年代測定および 2011 年度・2013 年度の調査で出土した人骨の安定同位体分析については、東京大学総合研究博物館の米田穣教授を中心に分析作業をおこなっている。

5. 本調査の出土資料は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターで保管している。

6. 調査に際しては、北海道アイヌ協会事務局より多大なご助力をたまわった。また調査地点地主である中谷榮氏には、調査期間の全体を通じてご理解とご協力を得た。調査までの準備と調査実施においては、小野徹町長、岩城修教育長、藤澤隆史社会教育主事をはじめ礼文町および礼文町教育委員会の支援と協力を得た。調査メンバーを代表して感謝の意を表する次第である。

目　　次

第1章　調査の実施体制について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第１節　バイカル・北海道考古学プロジェクトについて
第２節　調査フィールドとしての礼文島および研究拠点形成事業との関連

第2章　浜中２遺跡の調査と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第１節　調査にいたる経緯
第２節　礼文島の環境
第３節　遺跡の立地
第４節　調査への参加者

第3章　調査区について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第１節　調査区の設定
第２節　調査区の層序

第4章　検出された遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第１節　アイヌ文化期・擦文文化期・オホーツク文化期の遺構
第２節　続縄文文化期・縄文文化期の遺構

第5章　主な出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第１節　出土遺物の構成
第２節　土器
第３節　石器
第４節　骨角器類

第6章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

第 1 章　調査の実施体制について

第 1 節　バイカル・北海道考古学プロジェクトについて

バイカル・北海道考古学プロジェクト（BHAP）は、カナダ、連合王国、アメリカ、ドイツ、ロシア、日本の研究機関による完新世の狩猟採集民社会の文化変化と環境適応行動を比較研究する目的で 2011 年に組織された国際共同研究である。2011 年 1 月から 2017 年 12 月までの 7 年間にわたりカナダ社会科学・人文科学研究審議会（SSHRC）の中核的共同研究助成（MCRI）の支援を受けて実施されている。

当該プロジェクトの目的は、完新世初頭の気候環境変動の中で先史狩猟採集民社会がいかに地域適応し、独自の文化的多様性を生み出してきたのかを解明することにある。先史狩猟採集民に関する考古学研究には長い歴史があり、とりわけ北半球の状況について多くの関心が寄せられてきた一方で、具体的な環境への適応行動と文化的多様性の詳細な様相は、未だ十分に解明されてはいない。よって当該プロジェクトでは、以下の主要な検討課題を設定している。

1）内陸部と海岸部という異なる環境条件下での狩猟採集民社会の文化変動の検証
2）生物考古学的な手法を利用した環境変化が個々人に及ぼした具体的な影響の検証
3）遺跡と遺跡周辺でのサンプリングを通じた気候環境変動についての高精度のデータの採取

上記の課題を検証するために当該プロジェクトでは、主要なフィールドとしてユーラシア大陸内陸部と太平洋沿岸という大きく異なる環境条件を抽出し、完新世初頭の狩猟採集民社会の比較研究を進めていく。大陸内部の事例としては、東シベリアのバイカル湖周辺における新石器文化から青銅器文化への文化的変遷に焦点を当て、文化変化の動態と環境適応行動の解明を進めていく。一方、太平洋沿岸地域の事例としては、日本列島北部の先史狩猟採集民社会の文化的動態と環境適応行動の復元を進めていくことを目指している。

第 2 節　調査フィールドとしての礼文島および研究拠点形成事業との関連

本プロジェクトの目的である完新世初頭の狩猟採集民社会の文化変化と環境適応行動の復元にとって、礼文島は最良のデータが得られるフィールドである。プロジェクトとしては、後述する礼文島北部の遺跡の立地環境に注目し、とくに船泊湾域の遺跡群において、1）居住地点における生業活動の時期的変遷の把握、2）砂丘形成過程と生業活動面の形成過程の相関関係の解明、3）古人骨資料からの集団系統や古食性データに関するサンプルの収集、4）遺跡周辺における古気候環境データの集成を目指すことにした。

2012 年度より科学研究費補助金基盤研究 A「アイヌ民族文化の形成過程の解明に向けた総合的研究」（研究代表者: 加藤博文、2012-2015 年度）、2013 年度より日本学術振興会研究拠点形成事業（先端拠点形成型）「北方圏における人類生態史総合研究拠点」（プロジェクトコーディネータ：加藤博文、2013-2017 年度）の研究助成に採択されたことから、浜中2遺跡における考古学調査の実施主体を日本側の研究組織によって実施することとし、この考古学調査の実施中にバイカル・北海道考古学プロジェクトの事業の一環として、考古学に関連する授業の実習を受け入れることとした。また 2016 年度からは科学研究費補助金基盤研究A「境界域での民族集団の形成：考古学と人類遺伝学によるアイヌ民族形成過程の解明」（研究代表者：加藤博文、2016-2019 年度）に採択され、引き続き調査研究の継続を計画している。

第2章　浜中2遺跡の調査と概要

第 1 節　調査にいたる経緯

北海道大学とアルバータ大学による浜中 2 遺跡における国際共同調査は 2011 年度に開始された。調査の概要は、概要報告において提示した通りである（加藤・岩波・平澤・鈴木 2012）。2012 年度は、主に地中探査レーダーによる表層からの貝層や墓、配石遺構の分布状態を確認する調査を実施した。よって 2012 年度は発掘調査は行っていない。2013 年度は 7 月 23 日から 8 月 20 日までの期間で発掘調査を実施した（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2014）。2014 年度は 8 月1日から 8 月 31 日までの期間で発掘調査を実施した（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2015）。2015 年度はオホーツク文化期と続縄文文化期に加えて、縄文文化期の遺物包含層の確認を目的として、8 月1日から 8 月 31 日までの期間で発掘調査を実施した（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2016）。 2016 年度は、調査区の主として南側でオホーツク文化期の、北側で続縄文文化期および縄文文化期の遺物包含層を対象として 8 月 1 日から 8 月 21 日までの期間で発掘調査を実施した。なお以上を通じた調査内容については、いくつかの機会に簡潔な報告もおこなっている（岩波・長沼 2015、加藤 2015、岩波ほか 2016 など）。

第 2 節　礼文島の環境

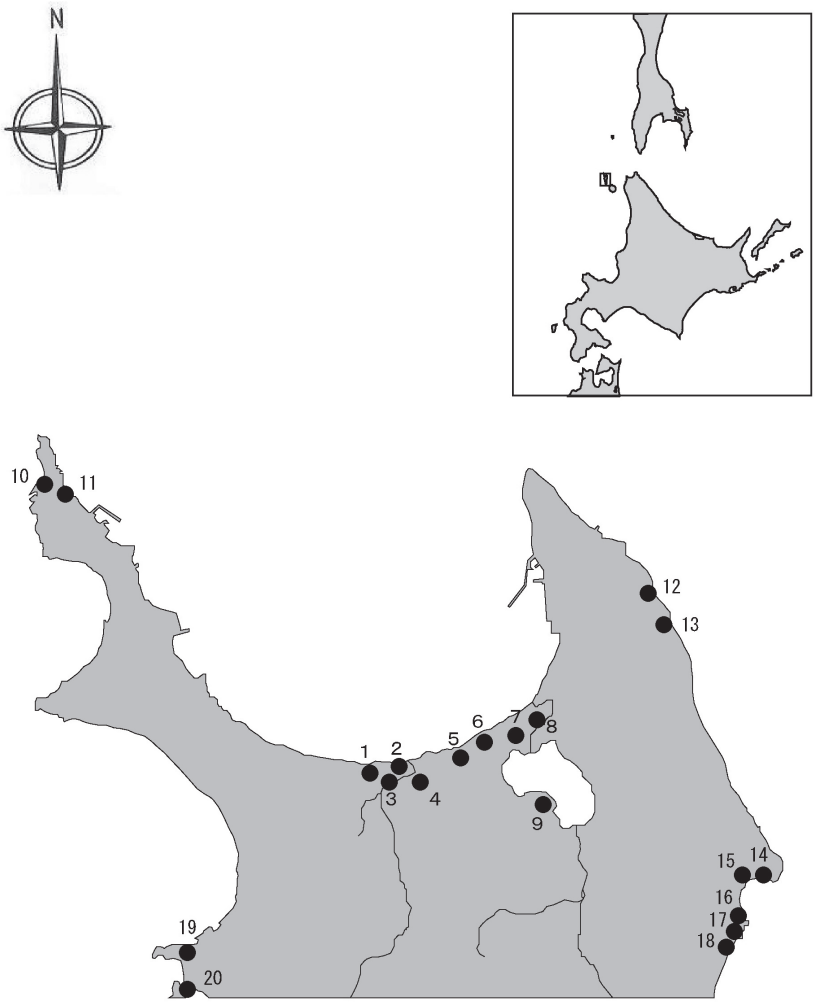
礼文島は、北海道島の北西約 60km に位置する離島である。南北に約 25.8km、東西に 7.9km と南北に細長く延びる島である。島の東西の両海岸は、海蝕崖によって急峻な海岸線が続き、島中央部より注ぎ出る河川により開析された谷状地形と河口が入り江状の地形を作り出している。島の北部は、一転して緩やかな起伏が続き、金田岬とスコトン岬に挟まれた船泊湾は、遠浅の大きな内湾地形を作り出しており、湾の中央部には複数の時期により形成された砂丘状地形が広がっている。

島の最高地点は、礼文岳で 490m であり、低標高の緩やかな起伏をもった島である。島の動植物は、離島特有の特色を示しており、ヒグマ、エゾシカ、キツネなどの大型中型獣は生息していない。植生としては、針葉樹としてトドマツ、ハイマツ、落葉広葉樹はダケカンバ、オノエヤナギ、草本類ではチシマザサが主体をなす。

島の北端に広がる船泊湾は、海岸沿いに広がる砂丘列と東部に位置する久種湖で構成される。湾の東部に位置する久種湖は、周囲6km ほどの淡水湖である。湖の前面には、船泊砂丘が東西ほぼ1km にわたり続いている。一方、船泊湾中央部には、島中央部より島最大の河川である大沢川が南から北へ向かい注いでいる。この大沢川の河口から湾の西側スコトン岬方向に向かい形成されているのが浜中砂丘である。これら二つの砂丘である船泊砂丘と浜中砂丘は、異なる時期に形成された複数の砂列帯によって構成されている。

第 3 節　遺跡の立地

船泊湾に広がる砂丘では、古くから石器や土器、そして人骨が出土することが知られてきた。これまでの調査でも縄文文化期からアイヌ文化期にわたる複数の遺物包含層の存在が知られている。船泊湾東側に伸びる船泊砂丘では、縄文文化期後期から、続縄文文化期、オホーツク文化期からアイヌ文化期にわたる遺物包含層が確認されている。この船泊砂丘の西端には、重兵衛沢川が船泊湾に注いでいるが、砂丘先端には擦文文化期から近世アイヌ文化期にかけての遺物包含層をもつ重兵衛沢遺跡、重兵衛沢2遺跡が知られている。



１：浜中２遺跡、　２：浜中１遺跡、　３：神崎ウエンナイ遺跡、　４：浜中５遺跡、
５：重兵衛沢１遺跡、　６：重兵衛沢２遺跡、　７：船泊遺跡、　８：オションナイ遺跡、
９：沼の沢チャシ、　10：スコトン遺跡、　11：水難諸霊の塔遺跡、　12：幌泊第１遺跡、
13：幌泊第２遺跡、　14：上泊２遺跡　15：上泊１遺跡、　16：上泊４遺跡、
17：上泊３遺跡、　18：東上泊遺跡、　19：鉄府イナウ遺跡、　20：西上泊遺跡

第1図　礼文島の位置と島北部の周辺の遺跡

船泊湾の中央部には大沢川の河口が位置する。河口の西側の浜中砂丘には、浜中1遺跡と浜中 2 遺跡の存在が知られている。浜中 1 遺跡は北海道道 507 号線の北側で、海側に貝層や墓が集中することが知られ、数多くの人骨資料が長年にわたり収集されてきた。遺跡の時期はオホーツク文化期から近世アイヌ文化期と推定されている。一方、浜中砂丘の南、後背丘陵の裾野には、神崎ウエンナイ遺跡が位置する。現在の神崎小学校のグラウンドや旧教員宿舎から、続縄文文化期の遺物を含む数多くの土器や石器、動物骨が出土している。

浜中 2 遺跡の範囲は、現在の浜中集落にほぼ重なる。現在、道道がこの浜中砂丘を東西に貫いて走っており、集落中央の最も高い地点は標高約 10 mを測る。砂丘の東西端は緩やかな傾斜を示し、砂丘自体の比高差は 5 m 程度を測る。この浜中 2 遺跡は、いくつもの文化層が累積する多層位遺跡である。1990 年には浜中集落の排水管の付替え工事に際する事前調査が実施され、続縄文文化期からアイヌ文化期にかけての多層位遺跡であることが明らかとなった。1990 年代には、筑波大学や国立歴史民俗博物館による学術調査が実施され、厚い貝層や住居、墓など長年にわたる複合的な生活痕跡の累積が明らかにされた。また 2011 ～ 2015 年度には千葉大学文学部考古学研究室が、浜中砂丘の最高地点（旧中島商店敷地等）で発掘調査を実施している。

第 4 節　調査への参加者

本年度の調査には、日本学術振興会の支援を受けた研究拠点助成プロジェクトの関係その他により、木村亮介准教授（琉球大学大学院医学研究科）、近藤祉秋助教（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）、鈴木建治（北海道大学国際本部国際連携課特定専門職員）、小俣友輝（大学力強化推進本部 URA）、種石悠（北海道立北方民族博物館学芸員）、高橋鵬成（東京都埋蔵文化財センター調査員）が参加した。国際フィールドスクールの参加学生・院生は以下の構成である。カナダ（アルバータ大学、マニトバ大学）3 名、連合王国（オックスフォード大学、ロンドン大学、アバディーン大学、エクセター大学、グラスゴー大学、カーディフ大学）7 名、アメリカ（ハーバード大学、ワシントン大学、ポモナカレッジ、ウィリアムアンドメアリーカレッジ、ウェスタンミシガン大学、セントメリーズカレッジ、インディアナ大学）7 名、ロシア（イルクーツク国立大学、極東連邦大学）5 名、オランダ（フローニンゲン大学）2 名、デンマーク（コペンハーゲン大学）1 名、フィンランド（ヘルシンキ大学）1 名、台湾（台湾大学）2 名、日本（北海道大学、東京大学、慶應義塾大学、東海大学）31 名の 11 カ国から計 67 名。ロシアおよび北海道大学からの参加学生・院生は、考古学に関連する実習授業の一環として参加した。北海道大学の引率教員は加藤および蓑島栄紀准教授（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）、坪田芳典（北海道大学非常勤講師）である。イルクーツク国立大学の引率教員は S. クズネツォフ教授、A. ハリンスキー教授（歴史学部世界史・国際関係学講座）である。東京大学からの参加学生は理学部生物学科 A コース実習の授業の一環として参加している。引率教員は近藤修准教授（東京大学大学院理学系研究科）である。岐阜県立関高等学校から生徒4名と引率の教諭 2 名（林直樹、長屋幸二）が参加した。結城幸司（アイヌ・アート・プロジェクト）、沢則行（人形劇師）が参加した。上記以外にアメリカから海外ボランティア 4 名が参加した。

引用・参考文献

加藤博文、岩波連、平澤悠、鈴木建治 2012『2011 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡考古学調査概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、 http://hdl.handle.net/2115/52658

北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室（編）2014『2013 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、 http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/56663

北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室（編）2015『2014 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、 http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/58760

岩波連、長沼正樹 2015「浜中 2 遺跡の遺跡形成過程とその特異性」『一般社団法人日本考古学協会第 81 回総会研究発表要旨』、日本考古学協会、 東京、 154-155 頁

加藤博文 2015「礼文島における海洋適応史の復元－国際共同研究を通じた取り組み－」岸上伸啓（編）『国立民族学博物館調査報告 132 環北太平洋地域の先住民文化』、 国立民族学博物館、大阪、125-143 頁

北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室（編）2016『2015 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌

岩波連、平澤悠、岡田真弓、種石悠、長沼正樹、藤澤隆史、蔦谷匠、佐藤丈寛、深瀬均、木村亮介、米田穣、安達登、佐藤孝雄、石田肇、加藤博文 2016「礼文町浜中 2 遺跡における考古学調査（2011-2016 年度）」北海道考古学会（編）『2016 年度北海道考古学会遺跡調査報告会資料集』、 北海道考古学会、登別、83-92 頁

第3章　調査区について

第 1 節　調査区の設定

調査区の設定は 2015 年度までの調査を踏襲し、中谷榮氏の所有地南西隅の基準杭から設定した 4m 四方のグリッド配置に基づいている。グリッド番号は南北方向をアラビア数字、東西方向はアルファベットで表記し、これらの北西交差点をもって呼称している（第 2 図参照）。本年度の調査は大グリッド A01、A02、A03、B01、B03、C02、C03、Z02、Z03 のそれぞれ一部と B02 の全面を対象に実施し、最終的な面積は計 43.5 ㎡となった。

大グリッド A03（以後の記載では A03 調査区 等とする）は、2015 年度に到達したⅧ層から掘り下げを開始した。獣骨の密集が著しく、作業用動線や足場を確保する必要上、大グリッド内の全体を均一に掘り下げることは困難であった。そこで 1m 四方の小グリッドを 9 箇所：A03-a1、A03-a2、A03-a3、A03-a4、A03-b3、A03-c2、A03-c4、A03-d2、A03-d3 を調査の対象とし、一部ではⅨ層を確認した。南側の 4 箇所（A03-c2、A03-c4、A03-d2、A03-d3）は、2015 年度からの継続でⅦ層から掘り下げを開始し、Ⅷ層の途中に達した。

A02 調査区は、A03 調査区と隣接する北半分の 5 箇所の小グリッド（A02-a2、A02-b1、A02-a3、A02-b4、A02-b3）で、同様に 2015 年度からの継続でⅦ層から掘り下げを開始し、Ⅷ層の途中に達した。

B01 調査区の北側 B01-a1、B01-a2、B01-b1 と B01-b では、2015 年までの調査で確認していたアイヌ文化期のアワビを主体とする貝層（Ⅰ c 層）や、擦文土器の破片集中（Ⅱ a 層）の平面的な広がりを追跡した。

B02 調査区は 2015 年度に到達していたⅢ層から掘り下げを開始し、全体をほぼⅣ層の上部にそろえて停止した（第 4 図上段および中段）。関連して、東壁（＝ C02 調査区の西端：C02-a1、C02-a4、C02-d1、C02-d4）の表土の一部が雨で崩落したので、地表からⅡ a 層上部まで幅約 50cm の法面を作成した。

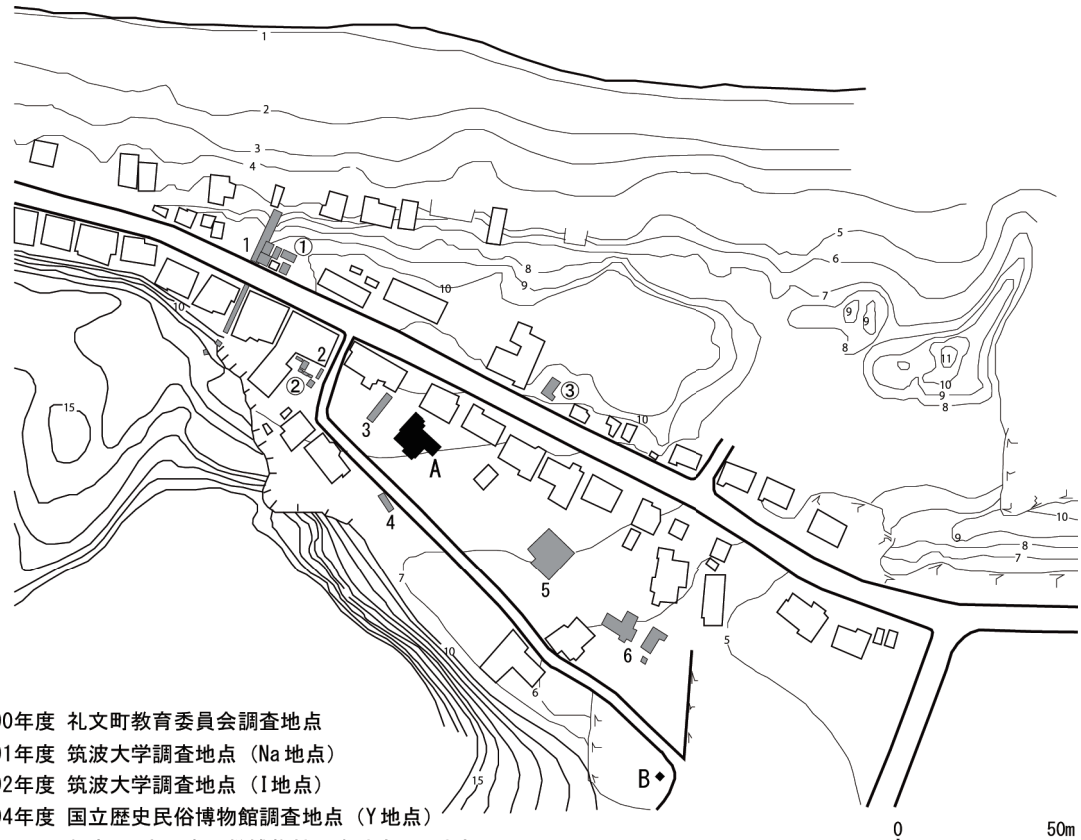
B03 調査区では、東に隣接する C03 調査区の一部（C03-a4）とあわせて、2015 年度に確認したⅧ層から掘り下げを行った。やはり獣骨の密集が著しく作業の遂行が困難であったため、小グリッド単位で市松状（B03-a4、B03-d2、B03-b4、B03-c2、C03-a4）に掘り下げ行い、一部でⅨ層を確認した。

第 2 節　調査区の層序

本遺跡の堆積層は、自然砂層と人為的な魚骨層や獣骨層、生活面で構成される。これらは互層となり全体で厚い文化層を形成する。ラミナ状に堆積する魚骨層は発掘範囲の全域に連続して均一に広がるものではなく、部分的に重なりながらも、局所的な広がりを見せて堆積している。調査区全体の基本土層は、上層から

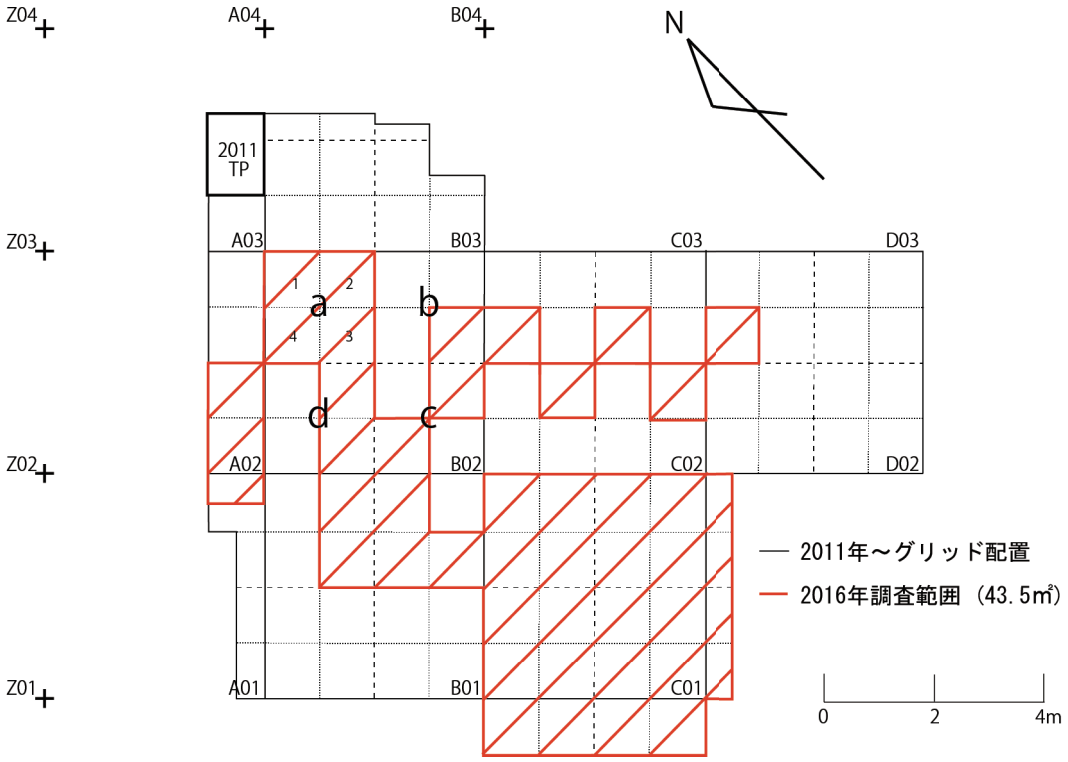
Ⅰ層：表土層および撹乱層。下層は一部、近世末期の文化層を含む
Ⅱ層：砂層。近世アイヌ文化期の局所的なアワビ貝層、擦文文化期、元地式期の遺物を含む
Ⅲ層：魚骨層および貝層。オホーツク文化期（元地式期、沈線文式期、刻文式期）の遺物を含む
Ⅳ層：砂層。オホーツク文化期（十和田式期）の包含層
Ⅴ層：砂層。オホーツク文化期（十和田式期）～続縄文文化期の文化層
Ⅵ層：砂層。続縄文文化期の文化層
Ⅶ層：砂層。続縄文文化期の文化層でⅥ層よりも遺物や遺構が増える
Ⅷ層：砂層。続縄文文化期および縄文文化後～晩期の文化層で獣骨の密集面を含む
Ⅸ層：砂層。縄文文化後期の文化層で獣骨の密集面を含む

となる。以下では、本年度に観察・記録した主な土層断面について個別に説明する。



1: 1990年度 礼文町教育委員会調査地点
2: 1991年度 筑波大学調査地点（Na地点）
3: 1992年度 筑波大学調査地点（I地点）
4: 1994年度 国立歴史民俗博物館調査地点（Y地点）
5: 1994-1997年度 国立歴史民俗博物館調査地点（R地点）
6: 1991-1993年度 筑波大学調査地点（HA地点）
①②③: 2010-2014年度 千葉大学調査地点（第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ地点）

A: 2011-2016年度 BHAP（北海道大学・アルバータ大学）調査地点（Nakatani地点）
B: 2013年度 BHAP試掘地点



第2図　遺跡周辺の地形と調査区配置図

1）A03・B03・C03 調査区の堆積層（第3図）

A03・B03・C03 の各調査区では、2015 年度からの継続でⅧ層以下を掘り下げた。動物骨の著しい密集により、掘り下げを実施できた深度（掘削土量）は限られ、また掘り下げた面的な範囲も 1m 四方の小グリッドを単位とした形であった。Ⅸ層の下底やその下の堆積物を確認する事も、本年度にはかなわなかった。次年度以後、1m 四方の市松状の掘り下げを解消して連続した土層断面を確保し、またⅨ層の下限も確認して、改めて記載・報告を行いたい。ここでは、文章記載については 2015 年度調査の概報で提示した内容を再録し、土層断面図については、2015 年概報で報告した図を編集した上で、本年度に掘り下げた範囲を加筆する形で提示する。

Ⅵ層：褐色砂層。この層を対象とした発掘面積のせまい過去の調査時には、無遺物層と判断した場所もあったが、続縄文文化期の土器片や頁岩製の石器、動物骨が出土した。

Ⅶ層：砂層。続縄文文化期の遺物と動物骨をⅥ層よりも多く含む。色調によって細分した。

Ⅶa 層：暗灰色砂層。

Ⅶb 層：黒色砂層。多量の炭化物と動物骨を含み、完形のアワビ殻を含む。この層に到達できた範囲（18 ㎡）においては、ほぼ全面に連続して広がっている。

Ⅷ層：砂層。続縄文文化期および縄文文化後～晩期に関連する可能性のある遺物と動物骨を多く含む。色調と遺物の出土状態によって細分した。

Ⅷa 層：にぶい黄色砂層。

Ⅷb 層：にぶい黄色砂層。完形のアワビ殻、イガイ殻が同一平面で確認された。

Ⅷc 層：灰黄褐色砂層。

Ⅸ層：暗褐色砂層。縄文文化後期に相当する可能性のある土器片と動物骨が出土した。

2）B02 調査区南壁で確認された堆積層（第4図）

B02 調査区では 2015 年からの継続でⅢ層の上面から掘り下げを開始し、Ⅳ層の上面で停止した。

Ⅰ層：表土および攪乱層。攪乱や堆積の乱れが少ない部分は細分が可能であり、そうした場所については、2013 年度の調査で観察した A02 調査区南壁の堆積を参考に細分した。

Ⅰc 層：混土アワビ貝層。アワビ貝殻に見られる刺突孔から、近世アイヌ文化期と判断された。

Ⅰd 層：明灰色砂層。東壁にのみ認められた。

Ⅰe 層：灰色砂層。地表からの撹乱が及ばない部分に比較的広い範囲に連続して広がる。

Ⅱ層：炭化物や人工遺物の混じる砂層。中世～近世アイヌ文化期、本年度は擦文文化期、オホーツク文化期の元地式期の遺物を含む。

Ⅱa1 層：極淡褐色砂層。完形の一個体に復元される擦文土器片の集中を検出した。

Ⅱa2 層：灰色砂層。動物骨や人工遺物を含む。南西隅のみに局所的に認められた。

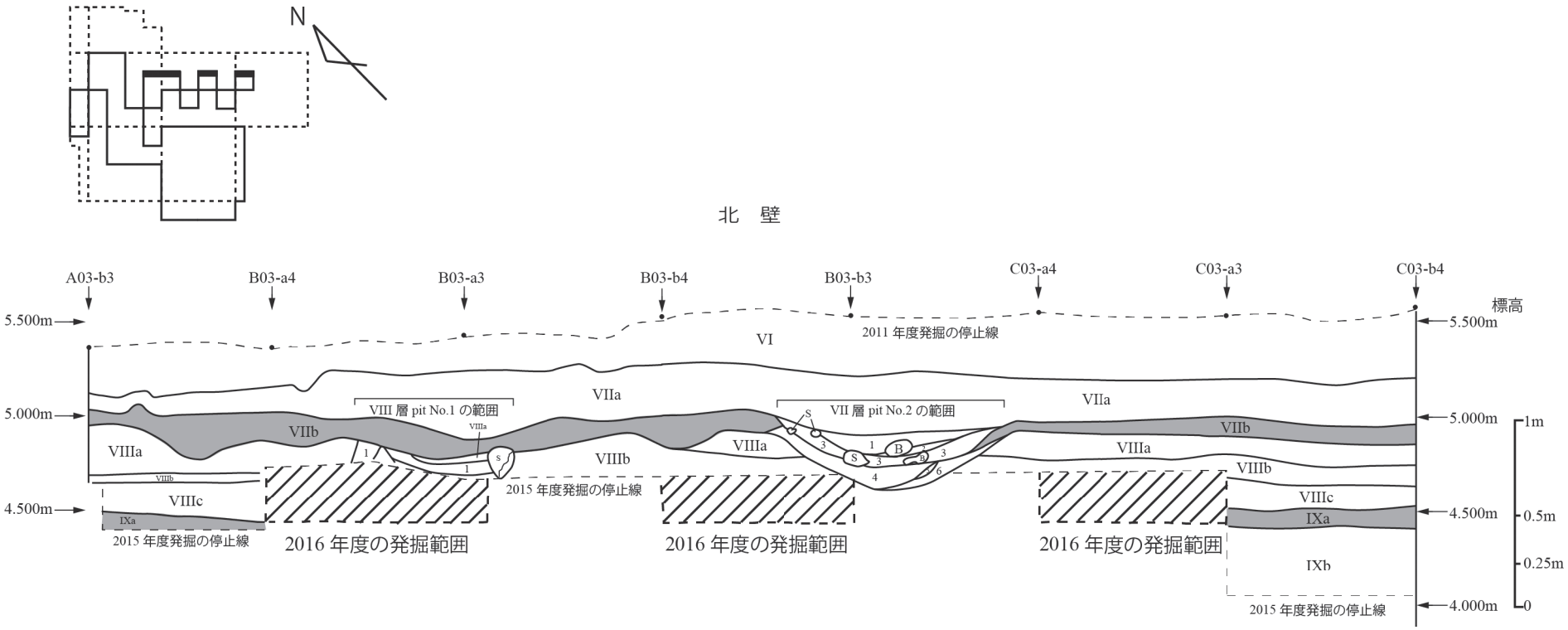
Ⅱa3 層：黄色砂層。南西隅のみに局所的に認められた。

Ⅱb 層：暗褐色砂層。黒味が強く弁別的であり、比較的広い範囲に連続する。

Ⅱc1 層：白色砂層。比較的広い範囲に連続する。

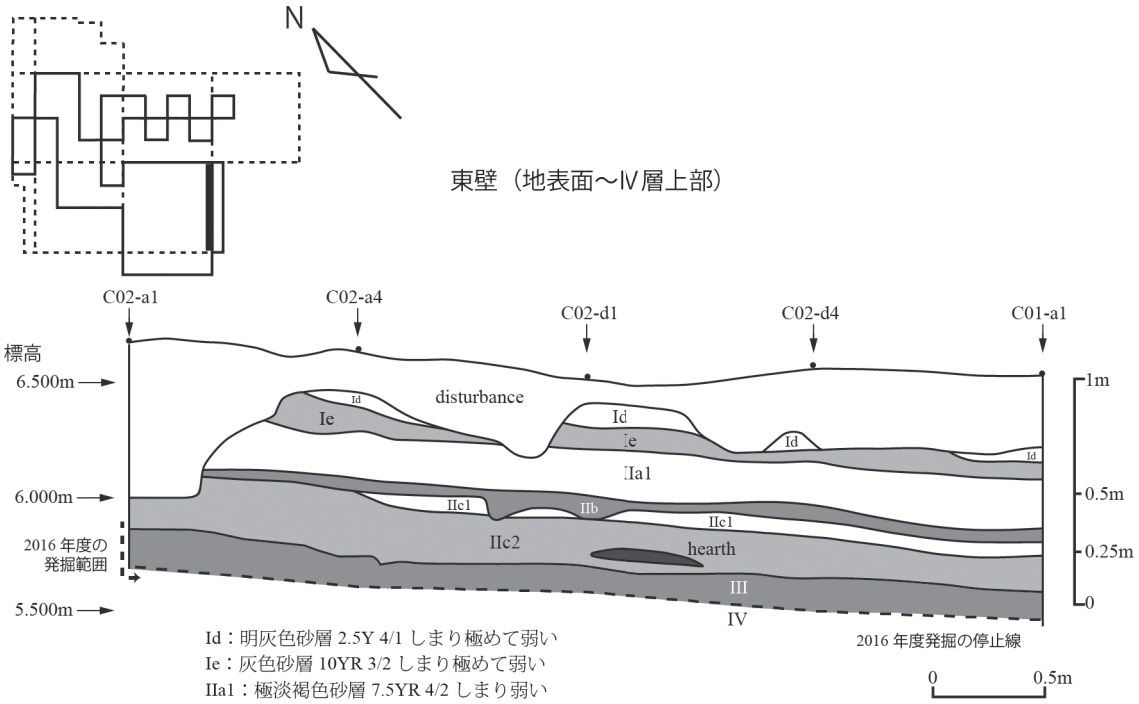
Ⅱc2 層：黒味が強く、比較的広い範囲に連続する。

Ⅲ層：魚骨層。黒味が強く、貝殻や動物骨を多く含む。南側（砂丘斜面の麓側）ほど層厚が薄く、他の調査区におけるⅢ層のような細分は困難となる。黒味が強いことでは 2013-2014 年度に他の調査で細分・設定したⅢb 層に類似する。

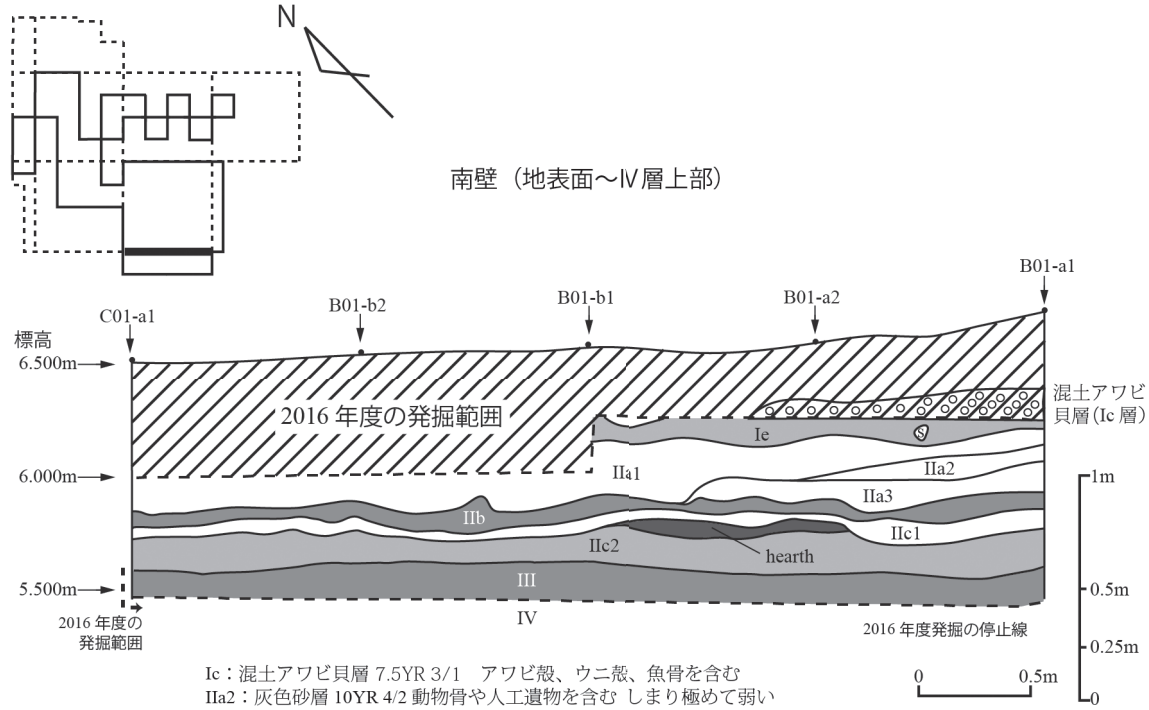


VI：褐色砂層 7.5YR 4/3　粘性なし　しまりなし
VIIa：暗灰色砂層 10YR 3/2～10YR 6/1　粘性なし　しまりなし
VIIb：黒色砂層 5 YR 1.7/1 粘性なし　しまりなし　多量の炭化物と動物骨を多量に含む　完形のアワビ殻を含む
　　VII 層 pit No.2 の範囲：2015 年度概報の第 5 図を参照
　　VIII 層 pit No.1 の範囲：2015 年度概報の第 7 図を参照
VIIIa：にぶい黄色砂層 2.5YR 6/4　粘性なし しまりなし
VIIIb：にぶい黄色砂層 2.5YR 6/4　粘性なし　しまりなし 完形のアワビ殻・イガイ殻を含む　海獣類の頭骨配置を検出した層準
VIIIc：灰黄褐色砂層 10YR 4/2　粘性なし　しまりなし
IXa：黒褐色砂層 10YR 3/1　粘性なし しまりなし　海獣類の頭骨が配置された面を含む
IXb：褐色砂層 10YR 4/4　粘性なし　しまりなし

第3図　A03・B03・C03 調査区北壁　土層断面図



Id：明灰色砂層 2.5Y 4/1 しまり極めて弱い
Ie：灰色砂層 10YR 3/2 しまり極めて弱い
IIa1：極淡褐色砂層 7.5YR 4/2 しまり弱い
IIb：暗褐色砂層 7.5YR 2/2 ～10YR 3/2　しまりややあり
IIc1：白色 2.5YR 5/2 しまりきわめて弱い
IIc2：褐色砂層 7.5YR 4/3～10YR 4/2 しまりあり
III：魚骨層 10YR 2/3 黒褐色 破砕貝をやや多く含む 魚骨を含む しまりややあり
　　他調査区における IIIb 層と類似するが対応関係については要検討
IV：褐色～灰色砂層



Ic：混土アワビ貝層 7.5YR 3/1　アワビ殻、ウニ殻、魚骨を含む
IIa2：灰色砂層 10YR 4/2 動物骨や人工遺物を含む しまり極めて弱い
IIa3：黄色砂層 10YR 4/3　しまり極めて弱い

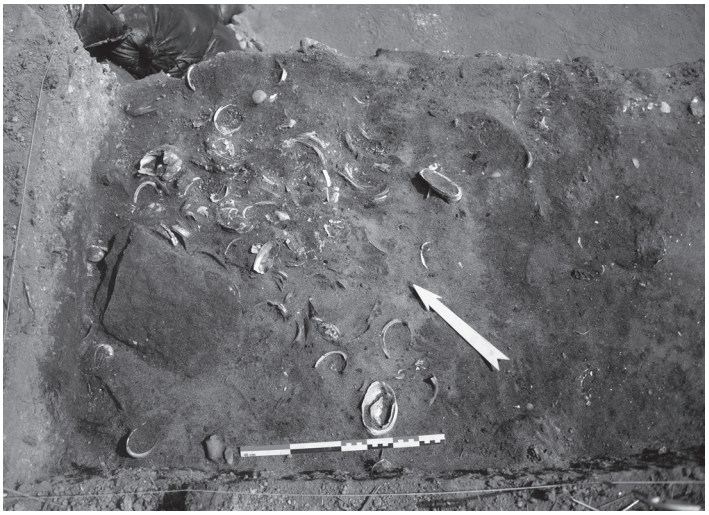
第4図　B02調査区　土層断面図

第4章　検出された遺構

第１節　アイヌ文化期・擦文文化期・オホーツク文化期の遺構

B02 調査区の南西端において、アワビ貝殻を特徴とする混土貝層（Ⅰｃ層）を、2013 年度の発掘で部分的に確認していた。2015 年度の調査で付近を精査したが明確な貝殻や魚骨の集中あるいは遺構は検出されず、地表からの攪乱により、この混土貝層の残りは部分的であることが判明していた。そこで、本年度は調査区の南側の B01-a1 および B01-a2 を拡張したところ、この混土貝層の続きを面的に確認することができた（写真1）。平面分布範囲は調査区外の北西に連続する可能性が高い。アワビの貝側には方形の人為的な孔が見られる。検出された層位から判断して近世アイヌ文化期であると判断した（写真2）。

擦文文化期およびオホーツク文化期では、明確な掘り込みや配石等の遺構は確認されなかった。



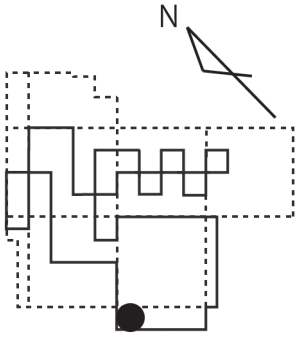


写真1　アワビ殻を特徴とする混土貝層（Ⅰｃ層）検出状況

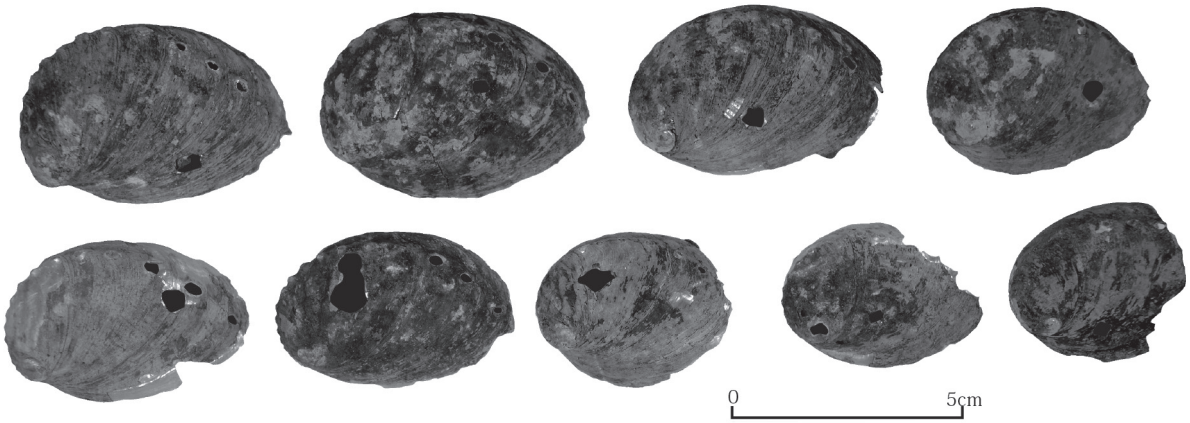
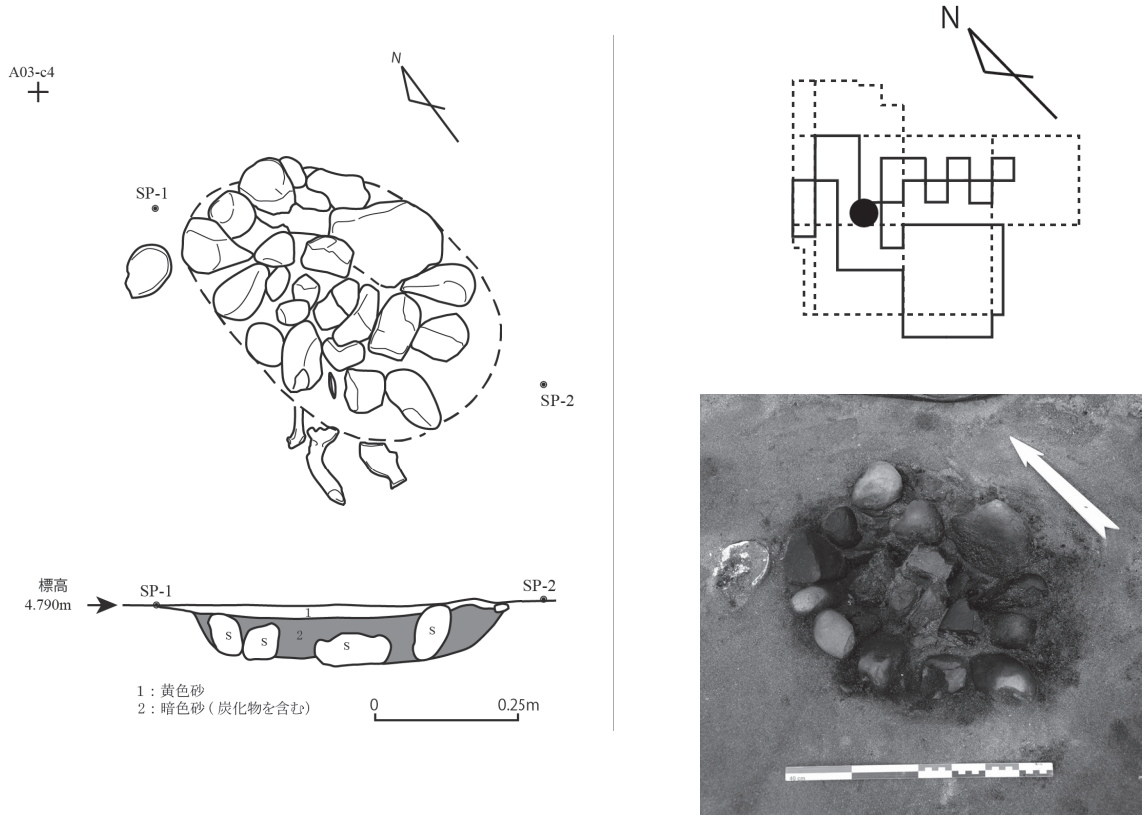


写真2　出土したアワビ貝殻の一部

第 2 節　続縄文文化期・縄文文化期の遺構

1）石囲炉・集石土壙

A03-c4 のⅧ層で、拳大の転礫を円形に配置した内部が，炭化物を含む暗色のしみを呈する石囲炉状のプランを検出し、Ⅷ層 Hearth No.1 とした。長径が約 50cm、短軸が約 40cm である。長軸に沿ってこの遺構を半裁したところ、炭化物を多く含む暗色部分の厚さは約 10cm 程度で転礫が充填されていた。過去の調査で検出した集石土壙と比較すると掘りこみが浅く小規模と言え、いわば石囲炉と集石土壙の中間的な性質とも考えられる。



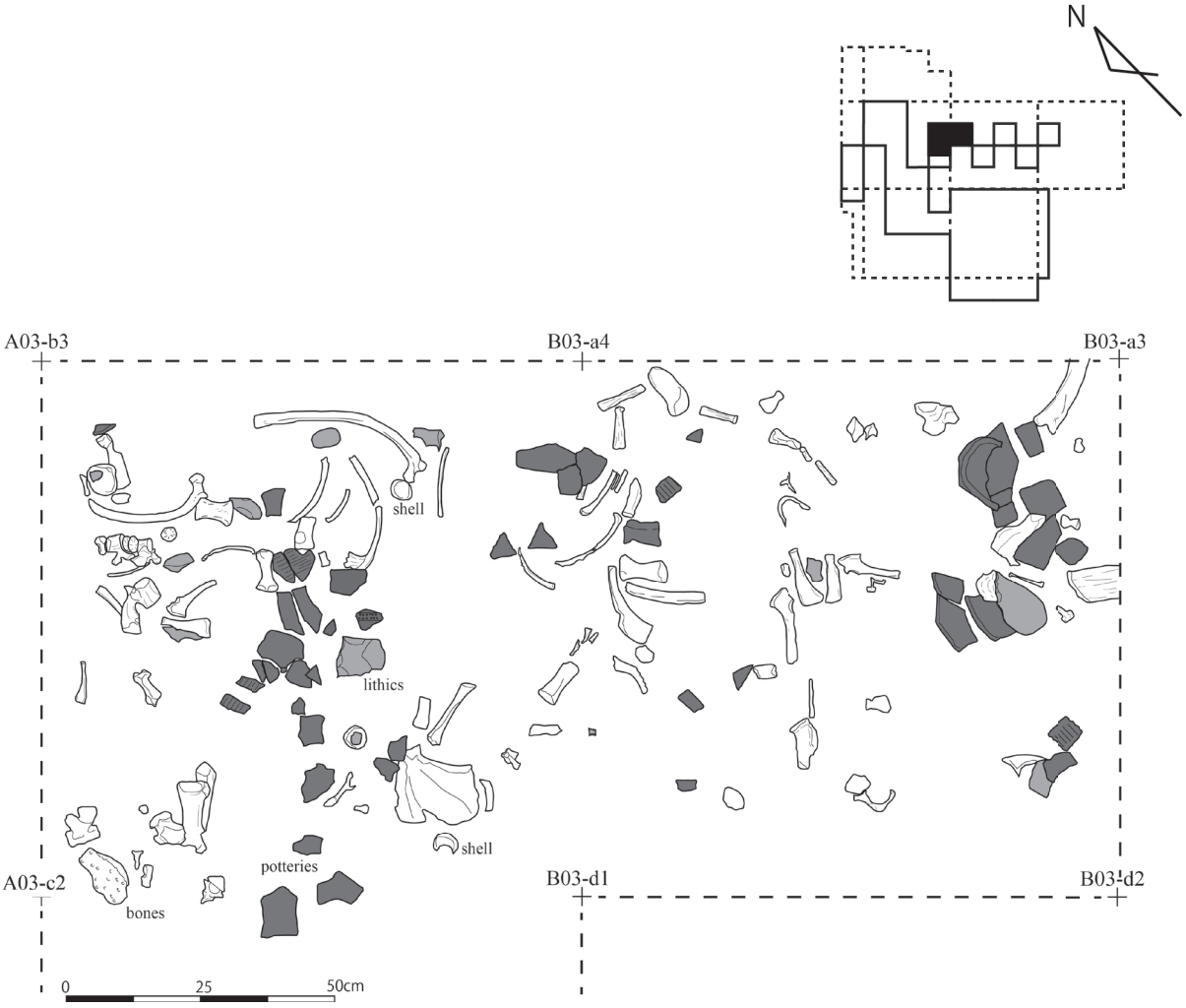
第5図、写真3　石囲炉・集石土壙（Ⅷ層 hearth No.1）

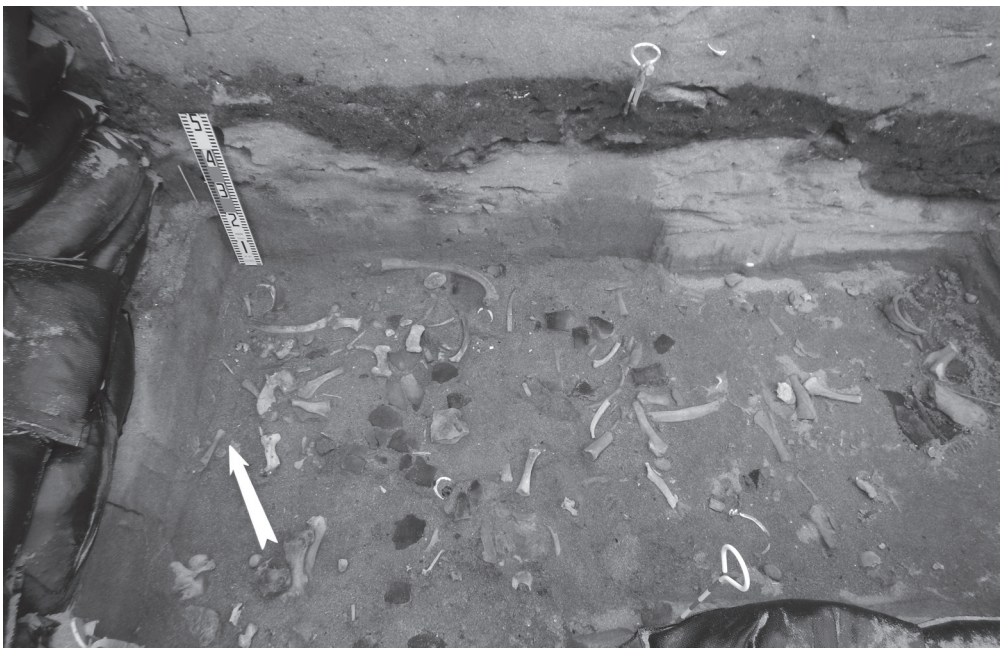
2）Ⅸ層で検出された獣骨類

今年度Ⅷ層より下の文化層を確認する目的で A03、B03、C03 調査区において掘り下げを行った。Ⅷ層以下の縄文文化期の様相として、豊富な獣骨を伴う生活面の広がりが予測されたため、調査対象区を市松状に 1m × 1m の小グリット単位で掘り下げを行なった。掘り下げを行なったグリットは、A03a、A03-b3、B03-a4、B03-b4、B03-c2, B03-d2、C03-a4 のグリットである。

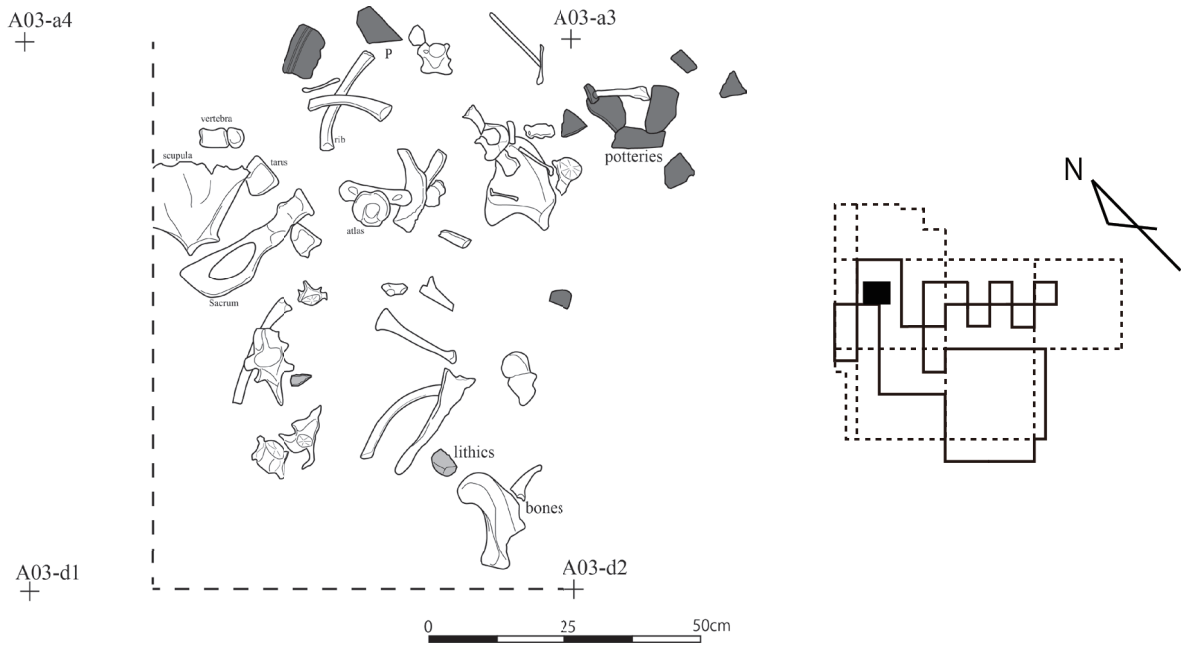
Ⅸ層の様相は、海獣骨や鳥骨が面的に広がる中に土器や剝片類が伴う状況が認められた。全体的な広がりの様相と確認されたⅨ層の層厚については、本年度の調査が部分的であるために不明である。より正確な状況については 2017 年度の調査を待って判断したい。なお出土した動物骨や石器類には比熱した痕跡は確認されなかった。また焼土や炉跡などの居住活動に関わる遺構も本年度の調査範囲では確認されていない。

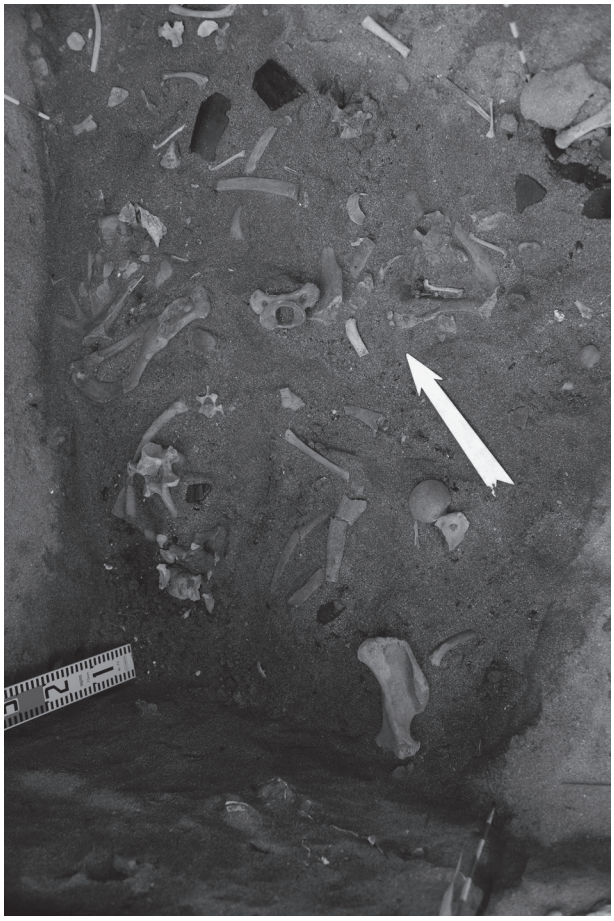
出土した土器片は、今回確認範囲では、底部と胴部が主体であり、縄文文化後期後葉と推定しているが明確に型式を確定する資料を得ていない。Ⅸ層の帰属年代についても今後の調査を待って確定したい。





第6図・写真5　Ⅸ層で検出された獣骨類の出土状況（1）





第7図・写真6　Ⅸ層で検出された獣骨類の出土状況（2）

第5章　主な出土遺物

第 1 節　出土遺物の構成

本年度の発掘調査においては、表土であるⅠ層から縄文文化後期と推定されるⅨ層まで、各層から多様な遺物が出土した。層ごとの出土総数や詳細な内訳は現在確認中だが、現場でトータルステーションを用いて 3D データを記録して取り上げた資料は土器片 376 点、石器 173 点、骨角器類 97 点、動物遺存体 377 点、金属製品 38 点（ただしほとんどがⅠ層）、炭化物サンプル 10 点、その他（OSL サンプルや粘土塊など）38 点の、計 1109 点であった。なお骨角器類とは典型的な製品やその破損品だけでなく、加工痕跡やカットマークのある資料を含めた点数である。

第 2 節　土器

土器は発掘調査区の全体において、すべての層から出土した。第8図と第9図に、2017 年度出土の文様の特徴が明らかな土器片の一部を図示する。

第8図はⅡ層とⅢ層から出土した擦文土器とオホーツク式土器を掲載した。1は、Ⅱ層から出土したもの、2−18 はⅢ層から出土したものである。

1は、擦文土器の頸部破片である。沈線で菱形に区画した内部に刺突を並行して並べている。

2、4−5、8−17 は、いずれもⅢ層出土のもので、沈線と刻みによる刻文を組み合わせたものである。2、8−15、17 は口縁部の破片である。11 は口唇を折り返して作り出しており、刻みを並列させている。4−5、16 は胴部破片である。

6−7は、摩擦式浮文の口縁部破片である。

18 は、Ⅲ層出土の口縁部破片であるが、口縁直下に円形の刺突文を並列させており、十和田式土器である。

第9図は、Ⅳ層からⅨ層より出土した土器片である。1と2は刻みによる刻文をもった土器であり、Ⅲ層由来の土器がなんらかの理由で混在した可能性がある。3−7、12 はⅦ層から出土した縄文晩期に属すると考えられる土器である。3、5−6は口縁部破片で口縁部直下に磨り消しと沈線を組み合わせた文様構成が見られる。4、7−8は胴部破片である。12 は底部破片である。

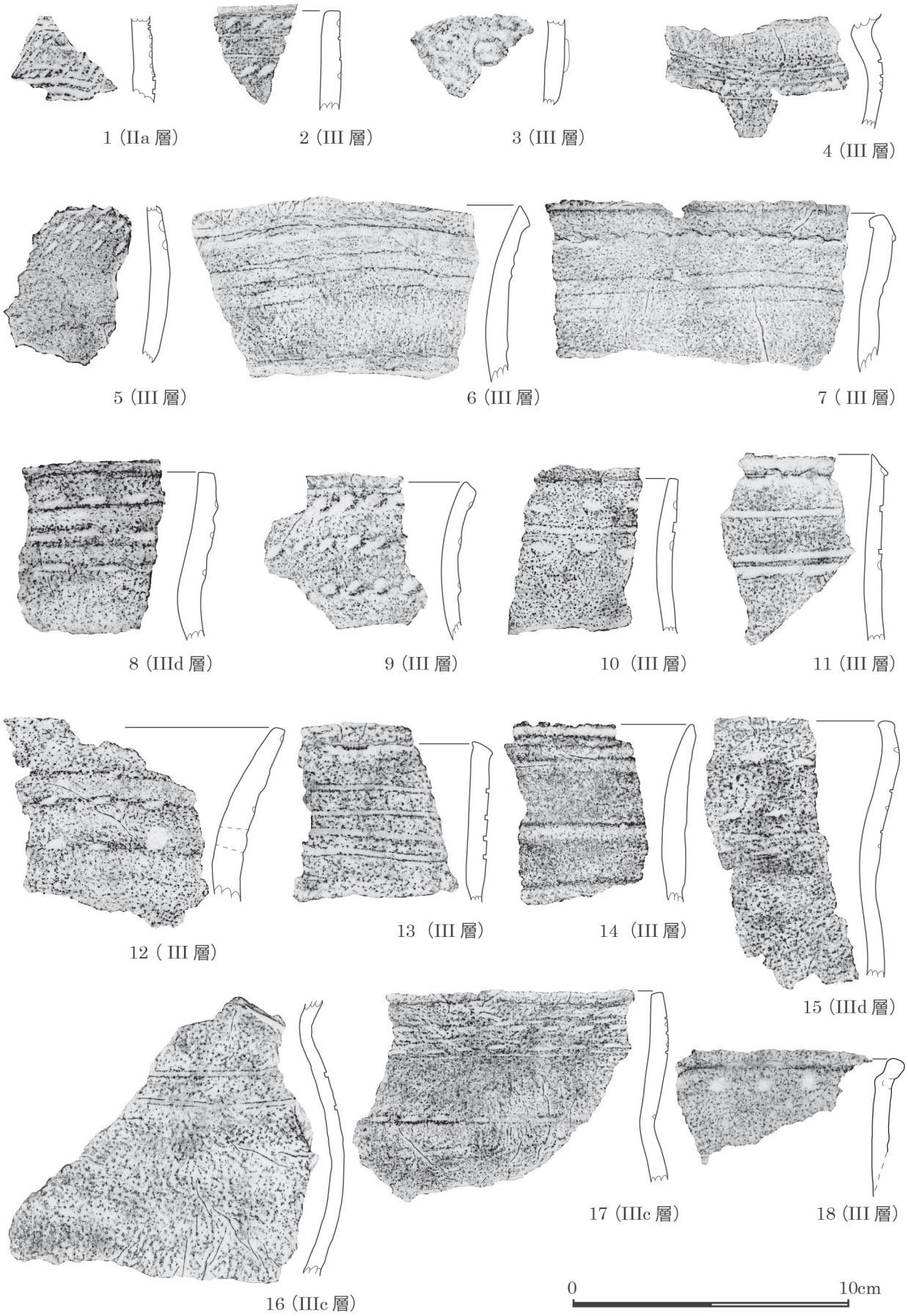
9−11, 13 はⅨ層から出土した縄文後期に属する土器である。10 は口縁部破片であり、口縁部下に磨り消しによる無文帯を設け、その上下を平行沈線で区画している。口唇には刻みが施されている。

8−9、11 は胴部破片である。13 は複数破片が接合した胴部破片であり、器面全体を縦方向の条痕が覆っている。

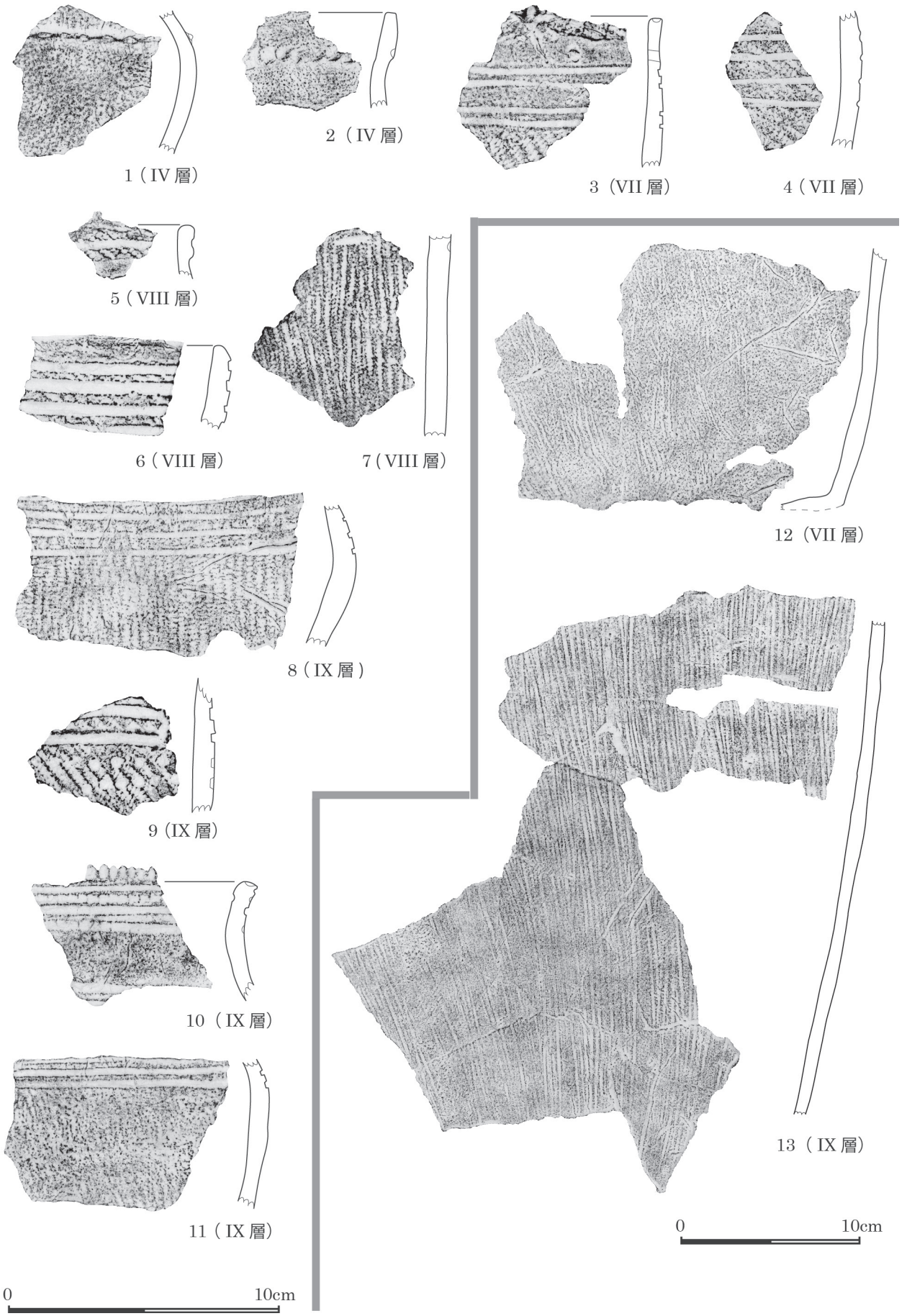
第 3 節　石器

第 10 図と第 11 図に、2017 年度出土の代表的な出土石器の一部について実測図を図示した。石材の多くは礼文島北部の在地石材である、頁岩やメノウである。島外から搬入された黒曜石もあるが数は少ない。器種分類は高倉（2014）、山谷（2014）を参考とした。

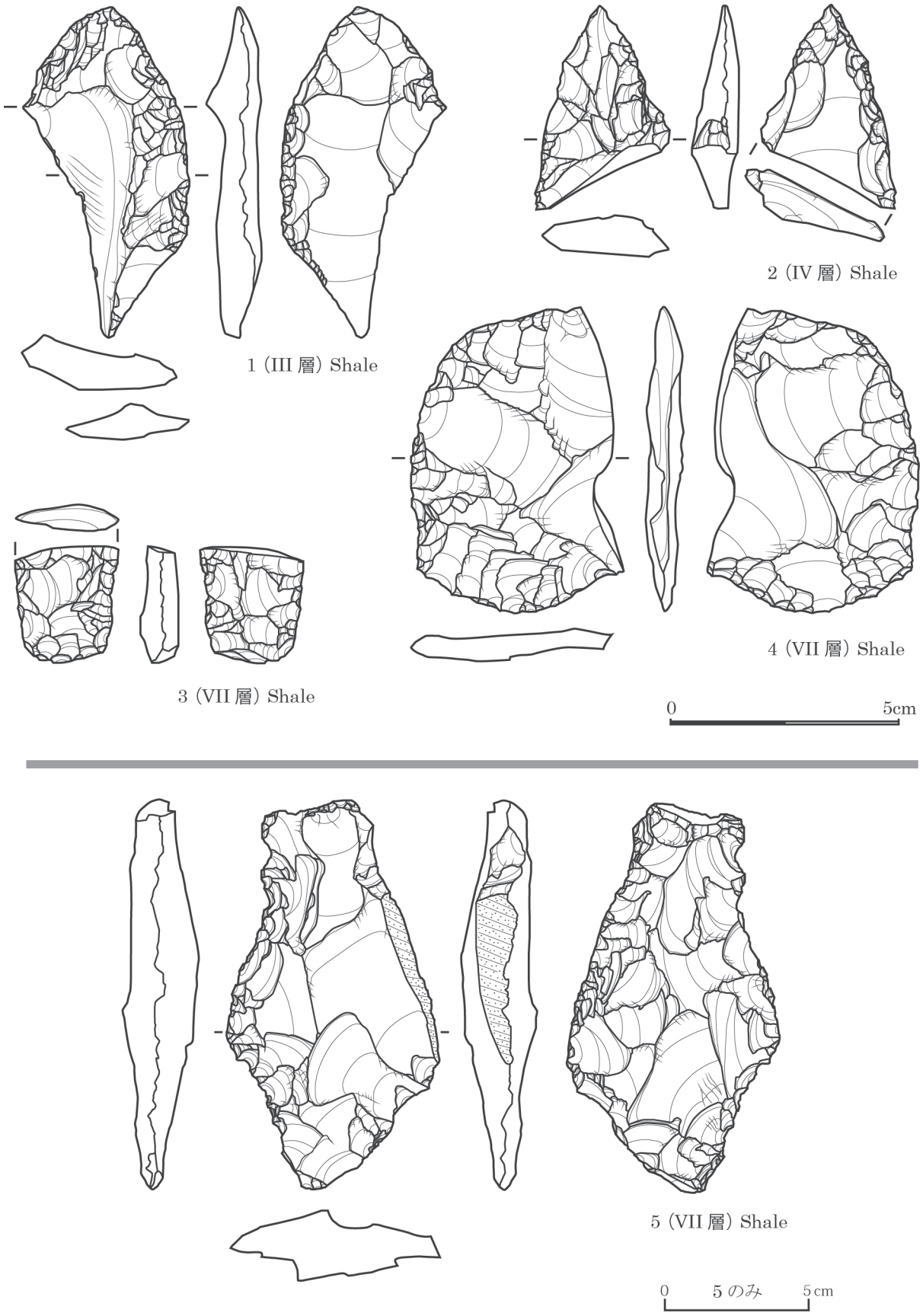
第 10 図は器体の両面を平坦な二次加工が広く覆う石器である。すべて頁岩製である。1、2は石槍（尖頭器）の破損品である。Ⅲ層やⅣ層という出土層位から、オホーツク文化期に帰属するとも考えられる。その一方でⅦ層出土の3−5は続縄文文化期あるいは縄文晩期の可能性がある。3は有柄の石槍（尖頭器）の基部、あるいは有柄石器（靴形石器）の一部と考えられる。4は精巧な二次加工で薄手に作られた両面調整石器であり、右側を大きく欠損しているために本来の形態は不明だが、ナイフ類（石匙、つまみ付きナイフ等）の破損品か。



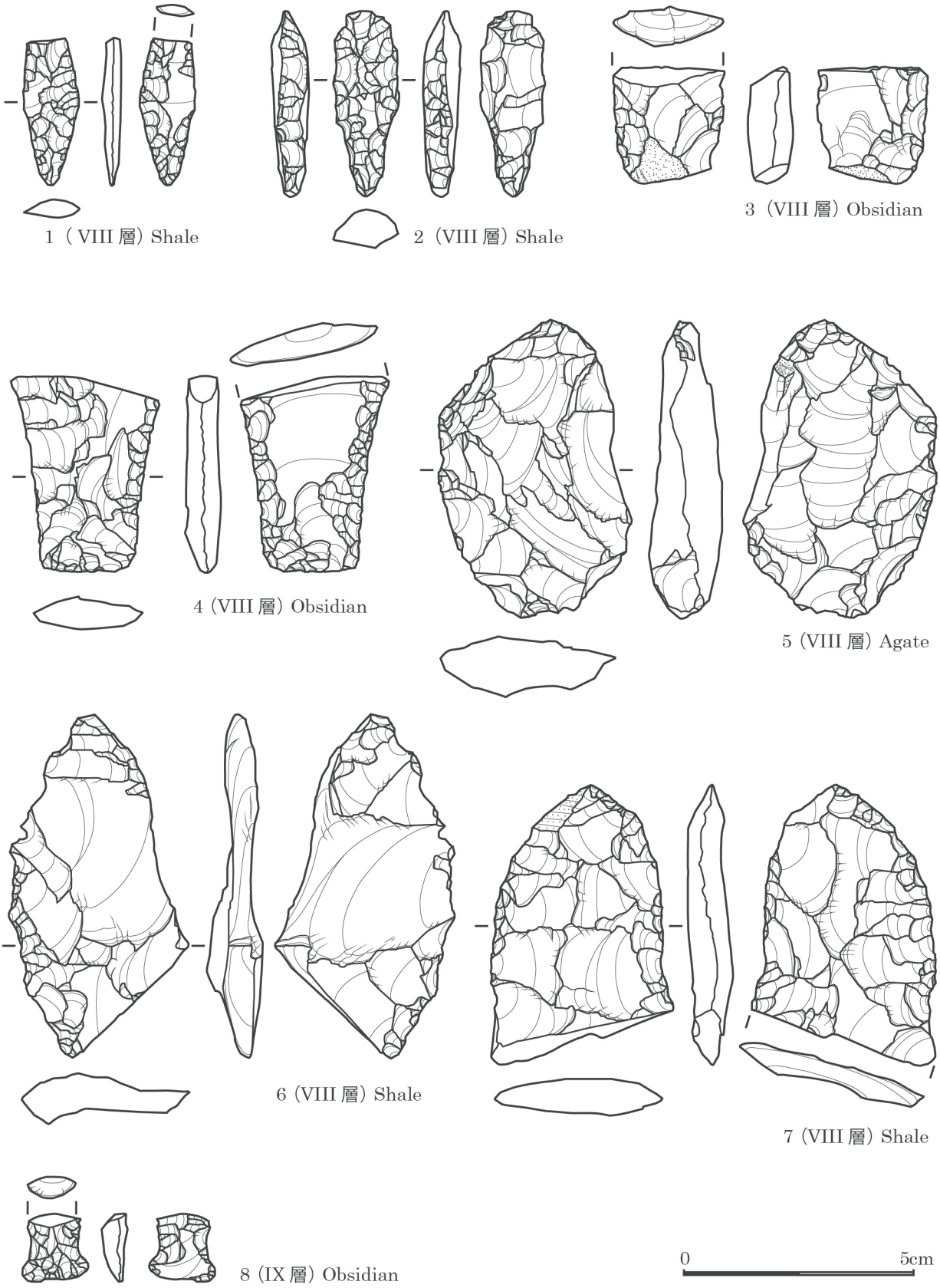
第8図　出土土器片　拓本図・断面実測図（1）



第9図　出土土器片　拓本図・断面実測図（2）



第10図　出土石器　実測図（1）



第 11 図　出土石器　実測図（2）

第 10 図の5は、平面形状が不整形な両面調整石器である。図で右側縁として置いた部分に広く節理が残るが折れや欠損等は認められない。なんらかの理由から、製作途上で加工が停止したものであろうか。

第 11 図はⅧ層とⅨ層から出土した石器であり、同じ層から出土した土器片から判断すると、縄文文化晩期または縄文文化後期に帰属する可能性がある。1は頁岩製の小型尖頭器であり先端を欠損している。2は頁岩製の石錐であり、礼文島では船泊遺跡（西本編 2000）で貝製平玉の製作に伴って類例が多数出土しているが、船泊遺跡ではメノウ製が特徴的である。

3は縞状の夾雑物が多く入り角礫の自然面を残す黒曜石製の、削器（スクレイパー）類の破損品である。

4は、夾雑物が少なく漆黒の地に褐色の模様が部分的にみられる黒曜石製で、丁寧な二次加工で打面と打瘤が除去されている。欠損部分が大きく本来の形態は不明であるが、なんらかの有柄石器の柄部分かもしれない。

5、7は左右非対称な両面調整石器である。5はメノウ製でやや厚手である。7は頁岩製で大きく欠損している。

6は頁岩製の石槍（尖頭器）の未成品あるいは欠損品である。

8は、Ⅸ層出土で3と同様に夾雑物の多い黒曜石製の石器である。欠損部分が大きいが、つまみ付きナイフ（石匙）の、つまみ部分とも考えられる。

第 4 節　骨角器類

骨角器類は、調査区全体のすべての層から出土している。第 12 図には、2017 年度出土の代表的な骨角器を図示した。第 12 図1－2、4、8はオホーツク文化期のⅢ層から出土したもので、第 12 図3は縄文文化期のⅨ層出土。第 12 図5－7は続縄文文化期のⅦ層から出土したものである。

1と4は、鳥菅骨を半裁し、研磨によって尖頭部を作り出した骨鏃の破損品である。ともに右側縁には刻みが認められる。

2は、組み合わせ式釣り針であり、全面が研磨されており、未製品の可能性もあるが形状から判断して再生品であると思われる。

5と6は、骨製のヤスの破損品である。5は尖頭部の破損品であり、6は基部の破損品である。

3は、イヌの犬歯の基部に穿孔した歯牙製の装身具である。

7は、ヒグマの頭部を形どったクマの彫像である。素材は海綿体の特徴から海獣骨であると推定できる。後頭部が破損しており、内側に削りによる抉りが認められることから、骨製容器の一部であった可能性も否定できない。

8は、組み合わせ式釣り針の柄部である。軸部本体に刻みと刺突による装飾が施されている。端部は欠損している。

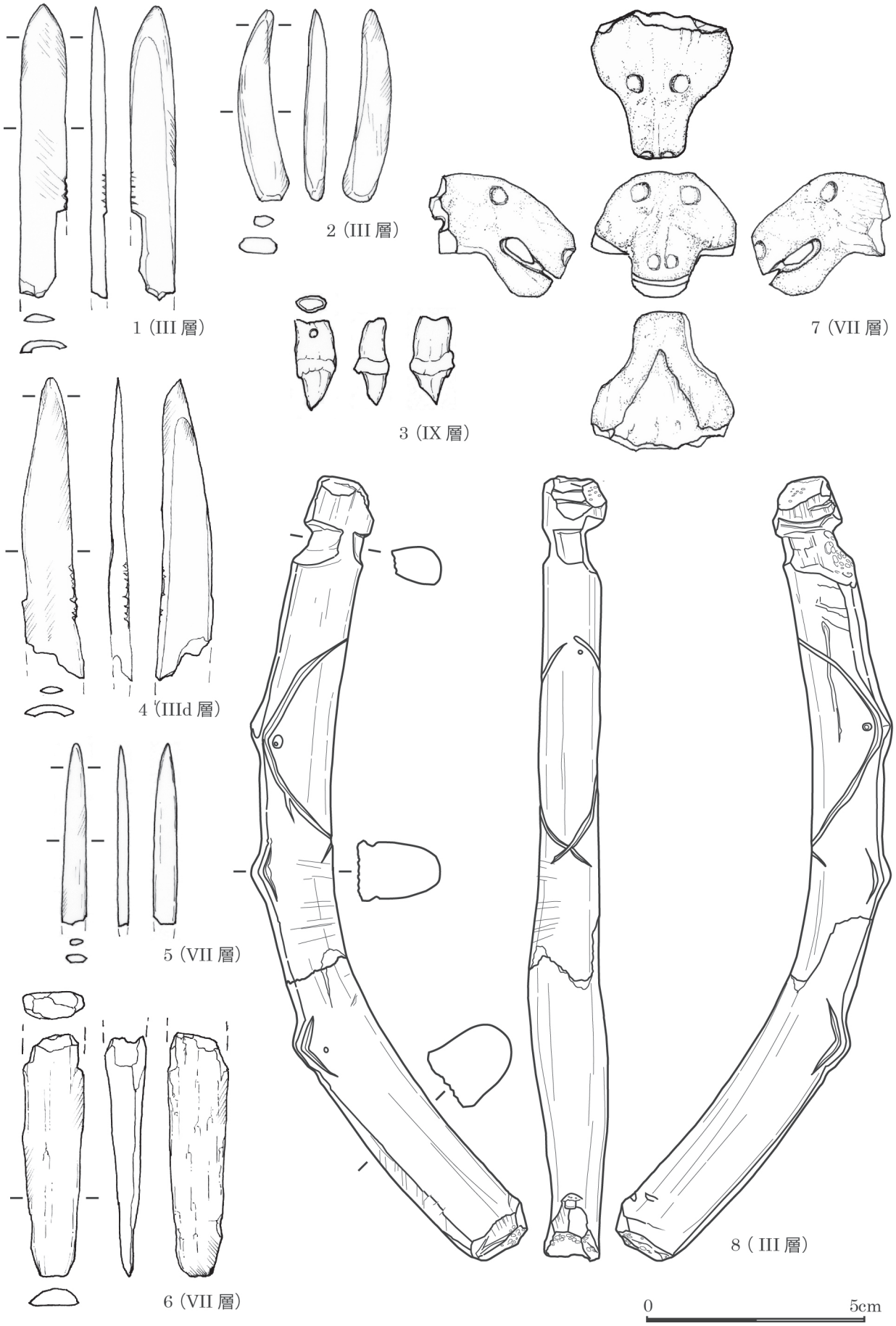
引用・参考文献

髙倉純 2014「続縄文・擦文時代の石器分類の実際」『平成 26 年度埋蔵文化財担当職員研修会』
2014 年 12 月 12 日、北海道立埋蔵文化財センター、当日配布資料

山谷文人 2014「石器分類の実際　オホーツク文化期」『平成 26 年度埋蔵文化財担当職員研修会』
2014 年 12 月 12 日、北海道立埋蔵文化財センター、当日配布資料

※これらの資料は髙倉純氏（北海道大学埋蔵文化財センター助教）、山谷文人氏（利尻町教育委員会学芸係長）より御提供いただいた。記して感謝いたします。

西本豊弘（編）2000『礼文町船泊遺跡発掘調査報告書－平成 10 年度発掘調査の報告』
北海道礼文町教育委員会、礼文



第 12 図　出土骨角器類　実測図

第6章　まとめ

2016 年度の浜中 2 遺跡における発掘調査では、2011 年度および 2013・2014・2015 年度の発掘調査で確認されていたオホーツク文化期の魚骨層と続縄文文化期の包含層に加えて、さらに下位に位置する縄文文化後～晩期の包含層を確認することができた。2016 年度の調査成果をまとめると以下のようになる。

1．発掘範囲の南側に位置する B02 区調査区においてⅠ層中に近世のアイヌ文化期のアワビ貝の送り遺構を確認することができた。アワビ貝殻に加えて灰の投棄も確認でき、漁撈具との組み合わせは興味深い資料と言える。アワビ貝殻の集中は南西へ広がっており、2017 年度の調査においてその全容を解明する予定である。

2. B02 調査区では、オホーツク文化期に属するⅢ層の広がりを確認できた。B02 調査区から南東方向に向けては、魚骨層の広がりが認めらない。Ⅲ層の層厚も発掘区の北西部に比べて、相対的に薄くなっていくことが明らかになった。この区域からはオホーツク文化期の明確な遺構は確認されていない。

3．B02 調査区と B03 調査区においては、続縄文文化期に属するⅦ層とⅧ層の広がりが確認できた。この続縄文文化期の遺跡利用は、Ⅲ層のオホーツク文化期の時期とは大きく異なり、炉や集石土壙の周囲に動物骨や石器、土器片が広がる様相が認められ、短期的な居住を繰り返すことにより残された居住痕跡が目立っている。発掘範囲はまだ部分的あることから、2017 年度の調査でより全体的な広がりを確認する予定である。

4．A03 調査区から B03 調査区においてⅨ層で確認された縄文文化後期の文化層では、動物骨と土器片や石器とが組み合わさって面的な広がりを見せる状況を確認できた。 遺物の広がりが密であるため、掘り下げを市松状に進めているため、その全容は、2017 年度の調査を待って改めて確認する必要がある。現状ではこれらの遺物の広がりには、炉や土坑などの遺構は伴ってはいない。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	にせんじゅうろくねんど ほっかいどうれぶんちょう はまなかにいせき はっくつがいようほうこくしょ
書　　名	2016 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書
副 書 名	Preliminary Archaeological Field report of Excavation at Hamanaka 2 site, Rebun Island, Hokkaido, JAPAN
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	北海道大学アイヌ・先住民研究センター 加藤博文研究室（加藤 博文、長沼 正樹）
編 集 機 関	北海道大学アイヌ・先住民研究センター
所　在　地	札幌市北区北８条西６丁目
発行年月日	2017（平成 29）年 4 月 17 日 作成

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
はまなか にいせき 浜中 2 遺跡	ほっかいどう れぶんぐん れぶんちょう おおあざふなどまりむら あざほろないほ 北海道 礼文郡 礼文町 大字船泊村 字ホロナイホ	01517	H－08－19	45° 43′ 26″	141° 00′ 96″	20160801 ～ 20160821	43.5 ㎡

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浜中 2 遺跡	遺物 包含地	アイヌ文化期 （近世）	アワビ殻を特徴とする混土貝層	方形の孔を有するアワビ貝殻	Ⅰ層中検出したでアワビ貝殻を特徴とする混土貝層は送り場と考え土られる
		擦文文化期 オホーツク文化期 （古代）		土器片（擦文土器、オホ（ーツク土器）、石器、骨角器（骨鏃、釣針など）	
		続縄文文化期 （鉄器時代～古代）	石囲炉・集石土壙	土器片、石器 （両面調整石器など） 骨角器類 （ヤス先、彫像など）	Ⅶ層でヒグマの頭部を模した骨製品が出土
		縄文文化期 （新石器時代）	動物骨集中	動物遺存体 （海獣類、鳥類など）	Ⅸ層で動物遺存体の著しい密集を検出した

要　　約	B01 調査区でⅠ層中で近世アイヌ文化期の送り場遺骨と考えられるアワビ貝殻の集中を確認した。B02 調査区でオホーツク文化期の魚骨層であるⅢ層の広がりを確認したが層厚は発掘区の北西部に比べて薄くなっていくことが判明した。南東方向に向けては魚骨層の広がりが認められない。B02 調査区と B03 調査区で続縄文文化期の Ⅶ 層とⅧ層は、Ⅲ層のオホーツク文化期とは異なり、炉や集石土壙の周囲に動物骨や石器、土器片が広がる様相が認められた。A03 調査区と B03 調査区で縄文文化期のⅨ層では、動物骨と土器片や石器とが密集した状態が面的に広がる状況を確認した。

2016 年度
北海道礼文町浜中2遺跡発掘概要報告書

2017 年4月 17 日　作成
編集　北海道大学アイヌ・先住民研究センター　加藤博文研究室
060-0808　札幌市北区北8条西6丁目